

書評

人間の思考と動物

——クロード・レヴィ＝ストロース著『神話論理Ⅳ 裸の人1,2』書評——

吉田禎吾・木村秀雄・中島ひかる・廣瀬浩司・瀧浪幸次郎（共訳）、(1)

吉田禎吾・渡辺公三・福田素子・鈴木裕之・真島一郎（共訳）、(2)

みすず書房、2008年；2010年、896 + 86p. = *L'homme nu*. Plon, 1971.

近藤 宏*

『裸の人』の中でも最もよく知られているのが、2000ページを超える全4巻の『神話論理』の最後を飾る「終曲」だろう。この章では、神話分析は一切登場せず、レヴィ＝ストロースの思考は西欧世界、とりわけ人類学、哲学、生物学、芸術などに向けられている。神話分析から独立した内容をもつ「終曲」については、さまざまな論考で既に言及されてきた。そこで、本評では「終曲」ではない部分、つまり神話分析に焦点をあてる。特に注目するのは、自然との関係の一つのトピックである動物に関する議論である。

『裸の人』でも、レヴィ＝ストロースの神話分析のルールは第3巻までのものと基本的には変わらない。神話を神話によって説明すること。その際に神話の「細部」に注目すること。そうすることで、諸神話の変形関係を解明すること。シンプルに説明すれば、これが『神話論理』でレヴィ＝ストロースが徹底して行っていることである。しかし、レヴィ＝ストロース自身が述べるように、『裸の人』ではこれまでの3巻より速いテンポでその作業が進んでいる [700-701]。それは、第3巻までに見出された諸神話の変形関係を、北アメリカ北西沿岸部の諸神話の内部に確認していく試みが『裸の人』だったためである。すでに発見されていた変形関係を異なる地域の神話コーパスに見出すこと、その意義を短い生の起源を語る神話の神話素の変形分析を通じて [197-226]、レヴィ＝ストロースは以下のように述べていた。

「たんに部族から部族へ神話が借用されるということでも、アメリカ大陸の植民の過程で遠い距離を超えて広まったということでもなく、同じひとつの図式によって生み出された、明確な言表があるのである。われわれにとって重要なのは、この生産的な図式そのものであり、その結果ではない。まずその一般的な性格を示し、その上でそれらがどのように働くのかを示さなければならないのだ。」 [219-220]

ここに示されているように、レヴィ＝ストロースの神話分析は個々の神話の変形関係を分析することで、それらに共通する図式を抽出する、という過程を経る。だが、神話の構造分析は個別の神話を抽象的な図式へと還元することではない。抽象的な図式と個別の神話、より正確には、それぞれの神話の細部表現＝神話素のつながりを解明することが、神話分析が目指している地点である。抽象性と具体物を巡るその独特な視線がもっとも明瞭に現れているのが、神話素のなかでも重要な位置を占める動物素の分析である。

動物素の分析は、『野生の思考』でレヴィ＝ストロースが設定した人間の思考と動植物の関係という問いの延長に位置付けられる。トーテミズム論、分類操作媒体など『野生の思考』の議論は、「種」概念をその核に置いていた。人間の思考にとって動物は分類操作媒体たる「種」のインスピレーションをもたらす存在として理解されていたのである。だが、神話分析の一部である動物素の議論では、分類体系との結びつきはほとんど省みられていない。

例として、アビという水鳥に関する分析を取り上げてみよう。「アビ女」神話は『裸の人』の序盤の分析で中心的な位置を占める。『生のもとと火を通したもの』の基準神話、『神話論理』の出発点となる南アメリカの「鳥の巣あさり」神話の変形として北米の「隠された子供」神話を分析する過程でこの神話は言及されていた [62]。細部に注

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 共生領域

目する神話分析は、必然的に様々なトピックで展開する。アビの分析はそのひとつであり、同じ神話群には複数の動物が登場する。そこで、アビ-サケの対比、マキバドリ-アビ-フウキンチョウの対比が取り上げられる。前者では、黒い地の上に白い斑点がある体毛を備えその肉は食べることができないアビと、豊かな色合いの光り輝く鱗を備え重要な食料であるサケが、インセストの関係においても兄弟でもある隠された男を熱望する背徳の女主人公（アビ）と、隠された男であり女主人公の正当な夫（サケ）として対比される。後者では、モノトーンで好色だが繁殖力のないアビ、豊かな色彩を備え貞節だが繁殖力のあるフウキンチョウ、フウキンチョウほど鮮やかではない色彩だが繁殖力もあり、また貞節であるマキバドリの対比が語られる [80-87]。

また、北アメリカ大陸全土を視野に入れた分析では、アビがオリオン座の付属物としての「天文学的^{コンテシジョン}な共示義」を持つことに触れながら、複数の神話に見られるアビの性質が多様であることを示している。貴重な首飾りと、傷んだ衣服あるいは人間の心臓という恐ろしい装飾品を身にまとうこと（文化的平面）、インセスト的な姉、あるいは死の危険を犯して愛するものと結びつくもの、性別のあいまいな超自然的な精霊で内婚と遠い結婚を左右する決裁者（社会的平面）、肉が悪い、あるいは聖なる存在として食べることができない（食の平面）、というように神話におけるアビの属性は揺れている。こうした揺れに対し、レヴィ=ストロースは「神話素に特有なこうした不安定を、わずかな距離であっても場所によって変化する、アビの行動習慣と結び付けて考えてみることはなかなか魅力的なことである」[247]と述べる。実際には北米に4種類存在するアビの同定、渡り鳥としての移動の経路、それぞれの地域の気象、環境的条件に関する詳細な研究への目配りを要請するこの試みは実践されることはなかった。だが、アビの分析においては神話素の属性を徹底して動物が備える行動学的な特徴に求めていく姿勢を見ることができる。

だが、神話に登場する動物素の属性は、常に動物行動学的な特徴に由来するものとして分析されていたわけではない。北米における「火の獲得」の神話には天蓋に付きたたてた矢に次々に矢を射ることで矢の鎖をつくり天へと上っていく鳥、コガラが登場する。コガラが春の到来を告げる鳥でもあり、半分しか成功しない媒介者（コガラの矢の鎖を伝って天に登ることはできても、地上に降りることはできない）という属性も備えていることを解明するために、天と地の媒介を妨害するクマ、さらにミソサザイ、アトリ、キツツキなどコガラと同じように小さな鳥との間に見られる相関関係および対立関係からなる図式を取り出す。そして、火の起源、雨の起源、短い生の起源の操作子が地域ごとに交換可能であることを明らかにする。ここでは、動物素がもつ細部の具体性は単に動物行動学的な事実ではなく、神話の中でのみ確認できる動物の形象の変形関係から解明されている。

ここまで見てきたように、動物素が備える属性は種の特徴と他の動物素との変形の関係によって解明される。つまり、一方では、入れ替えることのできない種、他方では、種を交換可能なものとみなすこともある神話における論理的な命題から導かれる役割とが動物素に具体的な属性を与えているのである。「二項操作子」と題された節では、この観点から、動物素に関する議論が展開される。

この節では、生と死という両立し得ない二項を媒介する存在として神話に位置する動物素が『生のもものと火を通したもの』で登場したイニャンブ鳥（ヒメシギダチョウ属）を先頭に次々に登場する。だが、その役割は、「先験的演繹と呼んだものの結果である。じっさいこの鳥の習性を経験的に観察したところで、なんらそのような結論は引き出せない。複数の動物素を不変式に還元する試みを通じ、結論は間接的にみちびきだされた」ものだという [668]。そして、エリマキライチョウ、エイ、リスという3つの動物素が同じように生と死を媒介する存在として位置づけられていることから、その理解を深めていく。そして、種としての特性から直接生と死を媒介する特徴を見ることはできないものの、それぞれ「生態の構造や生理、習性」の面で二項対立を具現化した存在であることを明らかにしながら、種としての動物が備える様々な特性と論理的な命題の関係を以下のように述べている。

「神話で表明される信念は、観察上のデータにとどまってもいない。それは経験的演繹の成果である二項対立に先験的演繹を接ぎ木する。そして先験的演繹は、生と死という至高の対立を調停するといった抽象図式に留まることなく、^{イメージリー}心象のまったき生成につとめ、生成した心象を改めて現実界に組み入れていく。」 [694]

動物素の議論は、人間と動物との関係だけではなく、他の動物、植物、天体などの様々な要素のあいだに重層的で多様な関係が構成されている様相を記述している。行動、形態の特徴、鳴き声、羽毛の色彩、捕食行動などによっ

て感覚的な経験と論理的な思考を結び付ける存在としての動物と人間の思考の関係が示されている。『野生の思考』から『裸の人』までの展開で、動物が人間の思考にもたらすものは、分類操作媒体としての「種」概念から、先験的演算と経験的演算を接続し思考と現実を繋ぎ合わせる心象へと移行している。分類操作媒体から動物素へと移行することによって、思考との関係で問題になる動物は行動学的な特徴や形態を取り戻した。この議論では、人間の思考を触発するのは、論理的な概念である「種」として直感された動物ではなく、動物の多様な存在そのものなのである。動物の形態、声、羽毛の色は人間の思考を触発し、他の存在や現象を理解するための一つの手段を提供する。こうして動物は多様な存在と現象との関係性に位置づけられ、心象＝動物素が生成される。そして、現実に存在する動物は、感覚的な事実にもみ基づく属性以上のものを備えた存在として人間の周囲を生きている。たとえば、肉に脂身のないエリマキライチョウは、病気の主となり、現実にその肉を食べることを人々は避ける [672-673]。言説の空間と存在の空間を切り離さず、織り合わせる役割を動物素は担っている。

動物の具体的な特徴をそなえた心象＝動物素の議論はまた、われわれの思考の中心を占める人間とは異なる存在カテゴリーとしての「動物」とも異なる、人間の思考と動物の関係を示している。動物素の議論が明らかにする存在と現象の多様な結合を手がかりに、われわれの思考のカテゴリーにとらわれない、アメリカ先住民の世界の理解の様相に接近することができるだろう。

